研究会記録　　1959・12・22

気候型の区分に関する話

Ima　温帯で寒帯や冷温帯とつけてもこれはもとより大ざっぱだし，人間自身も必ずしも温帯に支配されず，何処へでもいく。問題は現在では人間は寒帯までのびているが，古代に寒帯からエンパイヤが出ていないというのが大事なことである。梅棹の図でいえばオー地域は沿海国家でキー地域は大陸国家になる。その意味でオー地域はペリフェラルである。キー地域はセントラルになる。

Iin　沿海地域では海洋気象の影響を考えてもよいのでないか。湿度もあるだろう，従って森林になり一方では乾になると考えられる。

Kaw　森林寒とオアシス寒とは人間の方からいえば分ける必要がないだろう。

Ima　地域としては大きいから，かつてはエンパイヤができなかったが現在は非常に重要性をおびているといってよい。A.D. 815という図ではこの地域はまだホカしてある。古代は農耕の北限もうんと南だったろう。

Kaw　農耕に関してなら，早くから北まで広がっていたと思う。カラフトシベリヤはおそかったろうがヨーロッパの北やシナの北なら早くからあったと思う。

Ima　僕の考えではタトエ農耕が始っていても生産量があがらなんだら国家たてはなれんという問題だ。

Tan　モンゴルエンパイヤののびていったところはうの問題と関係があるだろう。

Ima　馬でいけるとこまでヨーロッパの方へくると森林から馬ではいきにくくなる。

Kaw　森林か，開いているかは大きい問題と思う。コサックがのびていったのもやはりコリドールになっているパークランドのところを抜けていったのだ。

Tan　地中海はどうなっているのか。

Ima　この図はオアシス型にした。

Vey　いま考えている気候型は必ずしも，オー・オニ地域の問題と直接に結びつくものではないのか。

Kaw　必ずしもそうではないが，しかしケッペンがこだわっている問題のひとつは冬の寒さであって，要するに大陸性の問題である。だから，クリマを基準にして梅棹の云うオー・オニがわかれるのか，又はほかの要素を入れるべきかはわからん。

Ima　それから地域性やがヨーロッパというとドイツからイタリヤ，イベリヤ半島まで入れたらかなり大きい。こっちは日本だけでこんなに小さい。シナ・マンシューまで入れて考えると同じくらいになる。

Tan　しかし，面積まで同じにセンナランということはないでしょう。

Ima　ないが，オー・オニというときには何できっているかという基準をもう少しはっきりする必要がある。

Iin　ケッペンではCfが森林の冷と暖とを両方ふくめたものになると思う。

Ima　すると東の方もひろがるナ，しかしCfといっても詳しくみればヨーロッパはCfbで冷で日本の方にはそれはちょっとだけあるが大体がCfaである。それにしても梅棹のいうオー地域はひろがらんナラン。

Iin　南支がそういうことになるのでないか。

Kaw　だからオー・オニは気候でも大体わけられんことはないけれどももっと別のfactorをもってくる方がよい。

Ima　そこで結局はシナと日本は同じにしたくないわけヤロ，だからシナと日本をきれいにスパッとわけられるものはないか。気候でいったらあかんネヤ。

Hvz　気候はそのままにしてもひとつ地続きの問題を入れるのではいかんのか。

Ima　そこで系統論になるが南支へのびてくるのはエンパイヤが北へ出てきてからだ。だから発展は大陸国家として発展して，今日まできている，という見方を出した方がよい。古代国家はシナでは北支，それから両河地帯，ギリシャローマといったところで出てくる。

Kaw　ウィットフォーゲルに似てきたな。

Ima　ペリフェラルというは沿海地域の森林型になる。

Iin　ウィットフォーゲルではエジプトやギリシャをfirst classにして，それのmarginal地帯，更に，それのマージナル地帯というように段階づけて1本の発展を考えているが梅棹の考えだと2本になるわけですね。

Ima　2本というか，ウィットフォーゲルではずれているところにあたる。

Tan　ウィットフォーゲルではマージナルとしたりmulticenteredとして別枠に入れたりしている。

Vey　今日は動植物区系の図や新大陸発見当時の民族の分布や大動物カラスキ使用限界などの図が新しくでているがこれらについてはどうか。

Ima　多少の喰い違いはあるがインド，東南アジアはずれるが地中海世界までみんなひとつの世界です。系統論的にいえば旧北区Borealである。ここで系統論のハイポセシスをだしたい。古代国家ができて，それがエキスパンションをはじめる，これからはずれたところにオー地域がある。ここまではエキスパンションが何でやしらんが及ばナンダ。エキスパンションの及んだ地域はその伝，おこってはほろびしてる訳く。谷クンとの話ではクールボンはregionalismとCentralismとを考える。regionalismにはfeudalismがある，feudalismというからなにか発展段階といままでとられているけれどもregionalismというものであれば時期によって間にはさまれてくる。つまりcentralismがおとろえたときにregionalismになる，それからまたcentralismになる，その時蛮族が入ってcentralismをやってしまうこともあるがこれがまたおとろえるとregionalismになる。日本でもそうなっている。日本が何故日本内だけでそれをやれたかというのはなぜか，はっきり云えないがともかくシナのそれの中

には入らずに region としてのってきた，そして industrialization のときにのびることができた。その時シナはだらしなかったかなんかでおくれをとった，しかしおくれを取り戻してのびたらまた日本は periferal になって大陸から圧力をかけられるという状況に戻るのでないか。結局 industrialization で periferal はのびたが，大陸国家の中へは足をふみ入れとらへん。周辺ばっかりカスメ取りヨッタンヤ。第一地域というてエライ自慢しとるヨーヤケドまた第二地域におさえられる。

Iin それは賛成だがなお，次のようにも考えたい。大陸では regionalism のときでも centralism の力が強く，沿海地域では centralism の時期でも regionalism の力が強いともいえないか。

Ima その違いがどこからでてくるかがこの前からも問題になっている。川喜田の云い方では慣習と統制となっている。川喜田のひとつの説明ではエキスパンションでは異民族を含んでいくために統制でイカンナランことになる，だから力が弱まるとワーッとなる，またしめることになる，やはりそういうことがあると思う。日本なんかはひとつはなれていたから regionalism でももとはひとつという気がどこかにあるがヨーロッパはいくつかの単位になって regionalism を発達させたといえる。

Tan 飯沼サンの説に関連してヨーロッパでは道路が発達しないが大陸国家では道路が昔から立派である。

Iin 大淮漑をやるときは統制をせざるを得ない，だから異民族を入れたから統制になったのでなく，統制が強いから異民族まで包含するようになったとも考えられる。

Kaw そうもいえる，例えばローマは始め中部イタリヤの regionalism なものを基礎にしてひろがる時に，central になったといえるだろう。

Sim 乾燥地帯では大勢でワーッとやらなんだら大帝国になれんということもあろう。

Iin その前に，なぜ大帝国になり得たか，を考えている。

Tan perpetuate するためには大地域が必要だという事情があるだろう。

Ima 狭い地域ではいろんなものがひとそろいあるためには大地域をひとつにせんならんことがある。

Iin 大陸国家では生産力が低いということが関連するだろう。

Iwa しかしあとの問題は縄張りみたいなモンで前がなければあとはそうならないという前後関係のある問題ではないか。モンゴルは始めは小さかったがあとで大帝国になるときそれを治める principle は外から借りてきている。

Kaw トインビーも時間関係を考えている。オアシス国家や都市国家を中心として地方共同体を偶像視する生き方がトコトンまでいって崩壊するまで互いに戦い合い，その崩壊のあとに世界国家が開けるという見方がある。

Ima 同じ見方を小規模に見たら地方の小共同体があってこれが地方になり，それが更にもひとつ大きいものになる。

Tan そうなのだが，そうして大きくなるなり方が大陸地域では非常に早い。ヨーロッパではカンマンだったから feudal という形に残った。だから大陸地域では feudal な時期は早くに経過してしまった。

Ima 日本の場合，Centralization があると中央にトミも集まり，制度も立派になる，するとそれの前に Kingdom があってもそれはヤニッコイものだ。それがシナの真似して立派になる。ところがヨーロッパはすぐ隣にお手本がないからモタモタした，だからむこうとこっちでモタッキ方がちがう。

Tan だけどフランクなら日本に似ている。

Iin 日本は永久後進国だという説がある というのはお手本が亡びなかったからだ。ヨーロッパのお手本はギリシヤローマだがこれは亡びて断絶があったから後進性がフッキレている。

Tan 都市が残っているが，

Iin だから revival という，

Ima 日本では依存している。

Uey しかし遣唐使の廃止の時には断絶しているだろう。

Ima それでもシナはあるから。

Uey しかし日本の気候は 9～10 から13世紀にかけては interest の転換がある。

Iin それでも続いているとも云える。

Uey つれづれ草などはアンビバレントになって必ずしもシナが手本とは云えないものだ。

Huz それでもお手本があり続けているというのと，お手本を再現するというのでは心理的には違うだろう。

Uey 心理的にも切れていると思う。ローマ法だって続いている。ギリシヤ学やラテン学も続いている。

Iin 上山サンの云う断絶が日本にあったというのもわかるが，切れてしまったとは云えないと思う。

Ima それでも，産業革命まで，シナのまねにはセナンダンヤから上山サンのように切れてるのかもしらん。しかしこれからあと，またまねせんならんようになるかもわからん。

Kaw regionalism というのは筋肉がつかなんだら，何にもでけへんといういき方で centralism の方は，脳ミソ優先型で脳ミソさえたてたらというので。

Ima 脳を洗いヨンネン。

Iin もともと，local に社会が成立するのだが，その始めの大きさがそもそも大きいということもあるだろう。

Tan それも考えられるが，やはり大陸国家でもヨーロッパの feudalism に似た時期を通ったように思う。

Iin 私もどこでも似たような発展段階は通ると思う。どこでも人間のすることにそう変りはない，と考えれば社会の基本的な構造は，似てルンぢゃあないか。地域による枠の違いが，modify することはあるだろうか。

Kyoto University

A	B	C	D
A'	B'	C'	D'
A''	B''	C''	D''

ダッシュは locality

AからBへ移るとき，AはBをおさえにかかる力を出しにくい。だからかえって周辺が出やすく，Bよりむしろ，B'があらわれる，と考える。

Ima　周辺といっても地球というもので限定されているから，ソナイに余計に周辺はない。大陸とペリフェラルとすると ↘ ↗ ↘ ↗ という関係が繰りかえされるかもわからん。まだ人類の歴史が短かすぎてヨーわからんけど。

Sim　アメリカ入れて三行になりませんか。

Ima　アメリカは大陸に入れてる。

Kaw　たしかに或文化が成熟すると次のステージは矛盾を含みながらもそこからは出ない。周辺の野蛮人から出るということはあり得る。

Ima　シナなたいなのは「わが中華は」と思って産業革命やらなかったのかもしらん。ロシヤは一寸気がせいて取り入れたがヘタベッタ。セヤケド，こんど立ちなおりヨッタラデーッといきよってわれわれも眼をみはることになったわけやな。日清戦争前后のシナの態度はおもしろい。

Huz　その説は飯沼サンの説を二行にかえたらおなじになる。

Kaw　シナでもフロンティヤにあったイテキが攻め込んだという見方がある。ロシヤでもシベリヤの方がフライハイトが高かった，これをふくんでいたので，帝政ロシアをひっくりかえせたということがあるのでないか。

Ima　ロシアはこのまえの話でも結局うまくつかめナンダ。

Uey　フロンティヤの点では案外アメリカに似ているかもわからん。

Ima　話は別になるが，日本もいちど大陸型になりかけた，ところがはじめてみると石油が足らん，何が足らんというので手をのばした，これは編成論の話になるか。

Tan　先の今西説も飯沼説も irreversible ということを含んでいるが，その時だんだん大きくなっていくということと，封建から資本主義へという構成のことを二つ考えた方がよくないか。

Uey　生産力もそうだ，

Iin　家族形態もからんでいる。封建領土内でまかなうような生き方が資本主義的になる程それをこわそうとする二つが対立して革命になるというように考えられる。

Ima　先の図式のAとか，Bとかはそれぞれ典型として考えている。それに伴ってその典型を成立させている資源とか生産量とかの條件があると思う。共産主義になったらやはりそれを成立させる條件があるか，それを知りたい。中国は6億，日本は1億。1億なら資本主義を成り立たせるが共産主義となったら6億という人口がなければならんかという問題，形式的にはなれてもリードしていくなどはなれないということはないか。

Iin　中国はおくれているからいつも資材を国家权力で生産材へまわしている，これが消費にまわしたら6倍消費してしまう。

Sim　日本など1億総ケッキして共産化してもかえって能率はあがるまい。

Ima　今みたいに，ぜいたくを味ってシモタラアカンク。社会主義化の問題はあとまわしにしてもロシヤがアメリカに追いついてきたことには何か大きさの問題があるように思う。

Uey　飯沼サンが指摘したように，8割の，農民からのピンハネがゴッイ。帝政時代の2倍ぐらい税をとっている。だからショッチュウ農民から問題がおこる。コルホーズがだから問題になる。

Tan　全体をひとつにまとめて，ピンハネするのと，いくつかにわけてやらせて，それぞれからピンして足すのと同じかどうか，という問題だ。

Iin　そこで，財が同じとすれば，6億ある方が大きいことになる。だからおくれている程一斉にピンハネする必要と効用があることになろう。

Tan　だからある程度までいったら4つぐらいに国を分けた方が能率があがることも考えられないか。

Kaw　ソ連などには，イデオロギー以外の要素がいっぱいあると思う。沿海地域で発達したやり方を内陸へ適用すれば，生産力はあがる筈だ。アメリカの西部開拓と同じことだ，生産が上らナンダラ不思議ね。

Sim　イヤ，ロシヤやアメリカは随分能率は悪い。

Kaw　その通り，しかしソ連のために弁護すればアメリカは集中がでケテいる。資源のコンビネーションが集中している。ロシヤは資源が分散している。そこでロシヤ人のもっているあやしげなノマディズム的感覚というものが開発に非常に役にたっていると思う。日本人ならあんな中でポッンとはヨー暮らさん。

Huz　そんなら日本人の満洲開拓は何でできたのか。

Kaw　日本人にこの性質があれば満洲はもっと早くから日本人のものになっていた。

Tan　ソビエットがシベリヤへ分散したのは独ソ戦以来のことではないのか。

Kaw　それでも，ロシヤ人自身が分散的傾向があるからできたので，分散そのものはもっと以前からあった。これはロシヤ人自身の傾向であって，centralization はロシヤ人にかえってマイナスになる。これ以上，centralization をやったらあとがコワイゾということになってきたと思う。

Iin　土地生産力が低いと，村の大きさもある程度以上は大きくなれないからいきおい，decentralization にならざるを得ないが，日本のように生産力が高いとなかなか収穫逓減の法則があらわれないから余り外へでていく気がおこらない，と考えられないか。

Kyoto University

Kaw　経験的には確かに考えられるが論法としてはそう簡単にはいかないかもしれない。
Iin　牧獲逓減の法則から考えている，生産力が高ければ人口が1割増え もそれを生産に投入すれば，limitが高いから牧獲もそれだけ上ると考えている。
Kaw　シベリヤ鉄道沿いに調べてみるとバイカル湖を越えて極東シベリヤは西シベリヤと同じだけの気候条件があるが人口となると，ウント（少い？），それがソ連時代になっても ちっとも改善されない。ふえつつあるが極東が発展しないということは centralization のマイガイがでているのだ。面白いのは初期に開拓した部落などは多少，特殊部落民のようになったのではないか。即ち（アムル？）とか，あの辺の本を読んでいたらこれはコサック腹であるなんて断ってある。コサックの延長がそのままあれになったのと違って，一般農民のカルチュアとすすれているかもわからん。
Ima　コサックはおくれたものということになるのか。
Kaw　そうかもしれん，イデオロジーの点で。それとコザックが例のキリカエバタ式の農業をやっておって一般農民のインテンシブなやり方になかなかかえらないということか。
Ima　ソ連の人口は？
Kaw　3億54万ぐらい。
Ima　そのうちソ連人は？　スラブ系は？
Kaw　おそらく8割ぐらいはそうでないか。ものすごいピッチでふえている。
Uey　してみると日本の人口は大きいものやな。
Kat　さっき今西サンは日本の人口が半分に減ったら困るといったが僕はむしろ半分に減った方がいいように思う。
Uey　経済学者は6千万といっている。
Iin　問題はこれだけの人口が何故養えるかという問題だ。
Huz　飯沼サンの牧獲逓減の法則というのが何度聞いてもさっぱりしない。あれは耕作法一定で，面積一定でという仮定で云っているので，実際は人口が増せば，耕作面積もふやしてきたし技術も改良されてきた。
Iin　それは否定しないが，一方明治まで人口はかなり一定だしヨーロッパでも18世紀までは そんなにふえていない。それまでの状態で考えている。しかし徳川時代までは耕積はふえてきている。
Uey　享保元禄あたりでも割合的にふえている。
Iin　それでもいい。
Uey　しかし人口はその頃から一定である。
Huz　要するに牧獲逓減ノ法則の問題ではないと思う。
Iin　それはヨーロッパと日本との比較でいっているのだ。
Ima　それなら生産量の問題でもある。
Huz　生産量の問題で片がつくと思う。
Iin　日本では，播種量の30倍，ヨーロッパはローマの末期から大体播種量の5～6倍というはっきりした違いがある。ヨーロッパではどんなに労力を入れても日本みたいにはとれない。少くとも大面積ではそうだ，その条件はどんなにしてもおもてに出てくるということを云ったのだ。
Iin　要するに，日本の方が投じただけの労力に対して生産がのびやすいという意味だ。
Kaw　それは感じる。日本人はナヨネナヨネとキュウリの芽をひとつひとつとったりする。反当7石を突破するとかいう，ああいう方向には すごく芸術的情熱を感ずる。
Ima　コリ性がすぎる。
Kaw　ところが一町以下のウネは作らんぞという広い面積をヤルあのすばらしさを知らん。僕等はそれがスキだが，みな園芸化の方向だ。これは趣味の問題でもあるが，いま云われたことと関係がある。
Tan　海があったり，山があったりすることも原因だ。
Huz　5反百姓で苞苴食えたということや。
Ima　パースナリティーのことになるが百年かしらんが，先祖以来の農耕やっていたら，もう長いウネをやりたいという気持の芯はとまってるのやろか。
Kaw　とまっている。さそい水でもやって気長にやったらまた芽をふくかもしらんが，急にはどうにもならん。
Ima　そういうとこでシナやロシヤは違うな。
Iwa　森林ということも関係ないか
Kaw　あるかもしらん。
Uey　広東なんかは確かに清潔なとこなど日本人に似ている。シナ人がきたないというのは，北支の話だ。
Kaw　話句，趣味まで違っている。

Sim　大陸発見のとき始めは東洋貿易の時から始める，これはコロンブスやバスコダガマから始まるわけだが，16世紀に始めから，17世紀の中頃まで，これには勿論，前期があって例の商業国家から十字軍以後ですけど，ベニスを中心としてサラセンの商人についでやり始める訳です。14世紀のベニスの最盛期の頃は船が34隻，ローマ帝国の4分の3の地域を支配していたと云われている。大体取り引きしているものは一番多いのは胡椒，それから肉桂，これらがスマトラとかセイロンからきている。ショーガ，ニクズイ，丁字，オースパイア，宝石，など主として香料が中心でそのほかシタン，ガラス，石鹸，絹，リンネル，ツヅレオリ，それから砂糖これらはいろんな原産地から入っている。スマトラ，セイロン，アラビヤ，インド，シナ，モルッカ群島，マライ半島，ボルネオなど近東・極東のあらゆる地域から入っている。代りに出していたのは，主として金・銀・ドレイ・木材・毛織，砒素・アンキモン・スズ・鉛

Kyoto University

アラビア―ポルトガル

銅，銀は主としてドイツ商人が南のドイツのものを出している。こういうものが主としてスペイン，ポルトガルがうけついで，主として香料などをとっている。それが中心になる。始めはコンスタンチノープルが1453年にオスマントルコにより陥落してしまって行けなくなったということになっているがいまではそれはウソだといわれている。コンスタンチノープルというのはもうこのころ重要ではなくなっていてトルコ人は通行料を取ろうとして通行を奨励していた，だからイスパニヤポルトガルがでてきたというのは実はイタリヤ商人と競争していたのではいけない，イタリヤ商人とアラビヤ商人は地理的に近くまた，独立权をもっている。そこで東洋への直接ルートを見かけなければならない。その必要からでていったのだといわれている。大ざっぱにいうとポルトガルが先に東洋貿易に入ったヘンリー航海王が15世紀の中頃までにでて相当やっている。アフリカの西海岸のGold coastのあたりの曲り角まで行っている，ドレイを一まぐらいとってきたらしい。一番はじめに行ったのはバーソロミュー・ユーディアというのが喜望峰のところまでいっている。それから98年にガマがインドのカルカッタまでいっている。ここでアラビヤ諸国と対抗している。―(録音ぎれ)―胡椒の値段が暴落したのでポルトガルはガマの時代からインドのゴアを根據地としてモルッカ群島に行く，ここが香料の一番の原産地。ポルトガルはこのあと南シナから日本へ入ってくるわけだが細部は略す。ゴアなどに商館を築いて壁で囲んだがこれは植民を目的としたとは見られない。アラビヤの東洋貿易を自分で独占し，アラビヤからの攻撃から守るというのがポルトガルの貿易の特色である。アラビヤとの対戦はdiuの海戦というのがある(1509)，このように非常に早くからポルトガルはアラビヤから独占权を奪っている。

Ima　アラビヤはその頃，王国か。
Sim　イヤ，いろんな国がある。
Ima　すると，アラビヤ商人は国籍なしの自由業か。
Sim　この後，オスマントルコのスレーマン大帝なんかはかなりcaptulationということをやっており王室の独占がかなり強かったと思う。
Ima　トルコの支配か
Sim　それともいとつやややっこしい名前のがある
Ima　しかしそれではトルコはアマリ国威を発揚しとらんナ。
Sim　ただしポルトガルがこうして独占权を握ったが結果としては中近東はだんだん没落しトルコは第一次大戦が完全につぶれてしまう。ただしポルトガルは海上支配で陸上の交通をおびやかすまでには至っていなかったらしい。オスマントルコの全盛期がスレマン大帝の時で(16世紀中頃)サヒヤ　朝ペルシャというのがあるが16世紀の終りから17世紀の始めだからまだ陸上交通は続いていた。これさえもおびやかされるのはのちにオランダが出てくる時分，17世紀に入ってからである。

スペインはアレキサンドル6世がポルトガルと同じ信仰なのに喧嘩するのはよくないといってアゾレス群島のところで切って　ここから東はポルトガル，西はスペインと決めた。スペインは西の方，アメリカ大陸へ出ていくということになる。ア6世のそれは1494年であった，コルテスやピサロが出ていってやり出した，だからスペインは主に銀をヨーロッパにもたらしたということでこの銀がヨーロッパの経済を拡大する。ヨーロッパで価格革命がおこってヨーロッパがインフレになって大体16～7世紀ぐらいで物価が平均3倍ぐらいに上った。一説によるとその物価の上りに賃金の上りがついていかなかった。そのズレで資本蓄積ができたのだという。もう一つ，15世紀になるとそれまで東洋貿易が拡大していたのが拡大を停止したともいわれている，つまりヨーロッパから東洋へ出すべき銀がだんだん枯渇してきていた。ところがスペインへ銀が入ってきたためにもういっぺん拡大が始まり，ヨーロッパの繁栄をもたらした。斯ういう訳で東洋との貿易がヨーロッパの資本主義への転換に大きな鍵になったと思われる。もっともマックスウェーバーなんかはその考え方は間違いだといい，内部からの発展を説くし，主流としては植民地を重要視しない方らしいがそれ計りとも云えないと思う。

ポルトガルが全盛期になるのが16世紀の中頃で以後衰退する。最盛にはアフリカ沿岸からモルッカ群島まで，南北ではペルシャ湾からケープまでの地域である。これがオランダに敗北して完全にこの地域がとってかわられる。

Ima　戦争せんとか。
Sim　勿論戦争がある。それとポルトガルは1580年にスペインに併合されてしまう，そしてオランダがでてくる。オランダが大きくでているのが17世紀，オランダがスペインに対して独立宣言をするのが1581年，此の時分イギリスは既に航路の開拓には熱心であった。コロンブスでも始めはイギリスへいったときはヘンリー7世に迷われているが既にキャボットがアメリカ探険に行っている。併しスペインの無敵艦隊を破るまではスペイン，オランダが頑張っているためにそれまでは海賊専門である。スペインの商船のもってかえったものを途中で奪っている。ポルトガルイスパニヤは貿易における見返り物資があまりない，スペインの方がまだしも銀等を直接持っている。もひとつポルトガルが没落した原因はインドの方にもあるという。南インドにミジャヤナガールという国があり，それが繁栄していてポルトガルがこれを相手にしていたのが，これが没落したのでポルトガルの方もダメになったという。このほかポルトガルはブラジルを植民地にしている，1500年にブラジルへ行ったスペインがあまり強くは主張しなかったので農業植民地にした。のちにこれはオランダ支配になってもう一度ポルトガル支配になる，19世紀になってイギリスになる。

Kyoto University

Sim スペインは フィリップ2世の即位か1556年でその頃か最盛期。地中海のレパントの海戦でトルコ
を破るのか16世紀後半，イギリスとは無敵艦隊の敗北か1588年。
Iwa トランスヒューマンスという牧畜の仕方かヨーロッパよりも生産性か低いということはないか。
Iiz あまりないと思う。のちになるとスペインの羊皮は毛織物かスペイン国内では発達せず，これか基
本的にスペインか敗れた理由だといわれている。原料としてはオランダ，フランドル，イギリス等に
輸出はされている。
Ima しかし南米あたりから持ってきた銀をスペインはウヤムヤに使いつくしたのか。
Kaw オランダの工業か吸いとったのと違うか。
Sim オランダ独立宣言はスペインに貿易の道を閉じられたからで。
Kaw 毛織物の方か勝ったということか。
Sim イヤ，それでもスペインの全人口の3分の1か毛織物業に関係してたと概説には書いてある。大体
衰退するのか1570年頃からである。その原因は基本的にはイギリス，オランダのそれに圧倒されは
じめたということである。
結局新大陸か中心になってくるわけだか太洋の方からフィリッピンにまず行く，それか1542年
にいく。そこからスペイン，イギリス，オランダの対抗の形になり，スペインか一番弱い。スペインは
アメリカ経由でフィリッピンへ行ったわけである。
オランダ独立か1581年にはじまり休戦1609年，1648年には独立かウェストファリア条約でできる。
オランダ商人は17世紀からは本国のスペイン商人とかなり張り合って活躍していた。
オランダの貿易はバルト海から穀物を輸入してアントワープ経由で南ヨーロッパへ送る。イベリア半
島から塩とか香料とかを入れ北欧へ運す。一方イギリス産の羊毛を入れ毛織物に加工する。
1594年に第一回商船隊か東インドに派遣される。1602年に合同東インド会社，これかオランダ
東インド会社と呼ばれているものだ。17世紀の前半に最盛期になる，後半はイギリスか押してくる。
東洋貿易に出ていく動機はスペインか1580年にポルトガルを併合する，するとリスボンに船自
か入れなくなる ポルトガルかはこんできたものを入れて商売することもできなくなりそこで自
分でのり出すのである。オランダの特徴は合同東インド会社という半ば政府か干渉したものをつ
くったことである，政府のあと押しで団結していた。これはイギリスも同じである。この会社
の4ファクターは現地の主権者と条約を結ぶ権利をもち自国の権利をうち立てることか出来た。
長官，司令官を任命し，軍隊も指揮する。貨幣をつくる権利ももっていた。だから民間の会社
ではあるが政府の出店みたいなものだ。もうひとつのオランダの特色はスペイン・ポルトガル
には布教的な色彩か強い。これは東洋のどこかにセントヨハネの国というキリスト教国かある
というのでそれを探し同盟して，サラセンをはさみ打ちにするというねらいもあった。カソリック
の布教にも熱心であり，モトモトスペイン自身かカソリックの宗教的専制主義であった。オランダは
そのものズバリであった。その点かシナでも日本でも歓迎された理由だろう。次にジャワか
中心になる，バタビヤ1621年，次にモルッカへ行ってポルトガルを追い出す。その頃すでに仆
リスか香料群島の方へ入っている，1623年アンボイナ虐殺事件か起こりそこでオランダとイギ
リスと日本とか衝突してイギリス人・日本人か虐殺されるワケ。これで完全に香料群島を支配するに至る。
結局オランダか東洋貿易の中心を最右的に握った。
Ima その日本人とは何者か
Sim バタン船。
Uey 朱印船。
Sim オランダ最盛期の支配地域はバタビヤ，アンボイナ，台湾，マラッカ海峡，セイロンの一部，ケープ
に及んだ。完全にポルトガルに入れかわったワケ。その他，主権はないか商館のあったところ
はペルシャ湾沿岸一帯，シャム，マレー半島，トンキン，日本 etc。アメリカではハドソン湾，
そして北米植民地をつくっている。いまのマンハッタンにつくった目的は毛皮取引。西印度会
社というのもつくられる。ただし北米ではイギリスなどの対抗のために余り進展しなかった。
併しニューヨークはもともとニューオランダとして建設されたのである。
以上までの時期は大体東洋の特産品をヨーロッパへもってくるという，貿易独占という形のものである。
まだ植民というところへいっていない trading post を握るということだ。領地の支配とか植民
地経営とかにはまだ重点が移っていない。だからヨーロッパの方か東洋の上にたったとは決していえな
い。東洋の社会か大きな打撃をうけたということももちろんない。
イギリス 始めはやはり東方貿易をしたくて航路の開拓をする。主に北の方ばかり行って新航路の発
見には失敗する。主に海賊をやり，奴隷貿易をする。これで海上権力のモトをつくるのがエリ
ザベス時代。17世紀に入ってから世界各地へドンドン出ていく。その点で一番大きいのか東インド
会社か出来ること。1602年。その翌年第1回商船隊かでている。始めはやはり東洋貿易の
ためのものである香料を支配しようとしていたか至るところでオランダとカチ合い，特にアンボイナ
虐殺事件で敗退する。そのためとうとうインドへ帰ってくる。その後，むしろ東洋の特産品独占
ということよりも植民地支配の形になってくる。地代の形で貨幣を捲きあげるという政治
支配の方へ移る。その転換かはっきり現われるのは18世紀だか，17世紀の間でもその傾向はある。
アメリカの方にも勿論植民している，18世紀の始め頃に例のヴァージニヤのジェームスタウンか
できた，1620年にプリマスに植民地をつくった，17世紀一杯ぐらいでアメリカ13州に入り
こむ。この頃，17世紀の始めから中頃まで争うのかオランダとの対抗。インド，アフリカ，
西インドの奴隷貿易特にメキシコ，北太西洋の漁業 etc。最後の落着はイギリスの航

Kyoto University

海條令(1651年)でつく。これは例のクロムウェルの出したもの。イギリスを経由する一切の商品はイギリスの船で運ばれなくてはならない。オランダは元来中継貿易だからこれで痛めおされて大きい打撃をうける。1763年に七年戦争が終ったがこれでイギリスはフランスを打破ってオランダに対する支配権を確立する。

Ima Sim
オランダはもうけなかったのか。
ものすごくもうけていた。

Ima Ima Iin
それをまたウジャウジャと使ったンか。
イギリスに負けてからあと，どうなるかというと金貸しになる。始めアムステルダムが金融の中心になって，ロンドンに支店をだしていた。後には金融でもイギリスに負けてくる。ロンドンが中心。

Kaw Sim
イギリスはオランダをやっつけてから頭をなでている。
産業革命が始まると，オランダ・スペインなどはイギリスでできた毛織物を売りさばくような手先になる。
フランス。フランスはイギリスと同じ頃，海上発展に実際に乗り出していく。始めはやはり海賊をやったり，アメリカへ出たりしている。17世紀の中頃に出ていっているのはカナダ，ノバースコシヤ，アカリヤに植民している。北アメリカで毛皮取引，木材漁業をやっている。東洋にはインドに商館を設けイギリスと対抗し，アフリカでも奴隷貿易でイギリスと対抗する。特にルイ14世の時のコルベールのもとで非常に活潑となる。17世紀終り頃からはイギリスとフランスとの世界各地での対抗がはっきりしてくる。イギリスのアメリカ植民地は狭いか人口の多いところで土地産物や造船，漁業をやるがフランスの方は毛皮などインディアンとの取引が多く，面積は広いが余り植民はしていない。フランスはケベックからミシシッピーの流域の方へ下っていく。特にオハイオ河へ拡がる，西インドでもジャマイカ，バハラとかがイギリスでマルチニクがフランス，アフリカでもイギリスがガンビヤ，フランスのマダガスカルというように対抗している。インドでもイギリスはカルカッタ，マドラス，ボンベイ，フランスがシャンデルナゴル，ポンディシエリを基地にする。18世紀と共にヒドクなる。第2次百年戦争と呼ばれるイギリスとフランスとの植民戦争で1688年からナポレオン戦争まで1815年である。イギリスに名誉革命がおこりウィリヤムがきてイギリス国王になりオランダと近くなってフランスに対抗する。この期間中は王位継承戦など何度も戦争がある。植民地の方でも同様に戦争がある。むろん名がついているが，ウィリヤム王の戦いとか，アン女王の戦いとか最後の七年戦争1754年から63年までで結末がつく，これでアメリカとインドにおけるイギリスの支配が確立する。アメリカではオハイオ河が争いの中心になった。イギリスの方はアルガニーを越えていって衝突する。イギリスがケベックを占領してフランスを破る。
インドでは57年にプラッシーの戦いでフランスが負ける

Ima Iin
その勝ち負けは何故決まったか。
いろいろ解説があるがオランダ・イギリスが毛織物を自分でつくる，これで負ける。オランダとイギリスの違いはオランダの方がギルド的な制約が強く原料が国内でできない。イギリスの方が自由競争で物が良質，こんどはイギリスとフランスの違いはフランスがおくれていて無理押しに追いつこうとするのがコルベールの時，併し毛織物生産でイギリスに圧倒されてしまう。結局イギリスは毛織物で資本主義への原着ができた，これは定説になっている。
フランスはこれに負けてから革命が起こった。

Ima Kaw Iin
イギリスが植民地に一番寛大だったといわれているからそれにあたるかどうかは確かでないがサー・ローレンスがヴァージニヤで農業をやったがスペインは掠奪をやった。

Ima Sim
今迄の話ではイギリスの先に出たのはポルトガル・スペインみな負ける。イギリスのあとから出てきたフランスなどもみなイギリスに負ける，それが面白い。
特に産業革命の頃を中心にみると，イギリスが勝ち残ること印度が特にイギリスに喰い込まれること，そしてこの時期は依然として商業優先であること，第2に毛織生産の大体半分が新大陸に出ていること，イギリスから直接アフリカへ，スペイン等を通って新大陸へ。

Iin Sim
反対に銀が入ってきてこれが東洋へ流れた
もちろん，この時期に中近東が没落し，陸上貿易も衰微する，その為は中近東アラビヤの特産品はヨーロッパへは動くが，ヨーロッパからは積極的に何も向っていかない。もひとつの問題は北アメリカの成立だ。南アメリカはスペインの領地になってから今の南米諸国になってくる。ところが北アメリカにはやや特殊な事情がある。北アメリカの植民地には3種類あってひとつは領地植民地，例えばメリーランドこれは近代地主の形でもひとつは会社植民地，最後に王領の植民地の三つである。勿論宗教的動機で渡ってきたものもあるがそれを強調しすぎることはあやまりである。1776年に270万余り中白220万，黒50万白黒合わせて半分くらいは先祖を辿ると不自由労働者として渡ってきている。白の方はeventual servantとしてもってきた。船賃タダの代りにアメリカへ着いてから売られて3～7年大体4年で自由になる，勿論市民权はない。アメリカの独立した理由はいろいろあるが定説の通りと思う。アメリカの移民がアメリカを考える上に重要だと思う。先に話したように渡ってくるのは大半が下層なものとして渡って来た，アイリッシュイタリーなどもそうである。18世紀になると黒人が多くなるがこれらがいつもだんだん上っていく，ここで階級的な個性がなくなりアメリカは中産階級の国だというような色々の神話が生れてくると思う。
産業革命以後の植民地経営は商業中心からはかわっている，植民地，特に東洋は単に特産品がそこ

にあるという以上に市場であり原料地である。これが帝国主義につながる。シナは茶，日本は絹，南米のコーヒーなどかわりにヨーロッパからは綿織物が流れ込む。これが農村の手織をひっくりかえし，生産構造がかわり，ヨーロッパが要求する原料の生産地という立場にかえられる。アフリカでも南米でもそうである。

19世紀末の帝国主義は普通産業の金融資本支配といわれているが，イギリス的工業独占に対してアメリカ，フランス，おくれてドイツ，日本，ロシヤが割込んでくるということであろう。そしてこの時期から植民地への投資，植民地の開発が積極的になる。これまでは余りそんなことはしなかった，これがこの時期の特色。イギリスは1813年に東インド会社の特許が切れ，イギリス商人一般に開放される，このときランカシャの製品がどっと流れ込む。これからイギリスのインド経営は良くいえば啓蒙主義的になってくる。北インドと南インドは経営が違う，北では地主階級を育成してそれに地代をとらせる，南は直接取りたてている。そして暗殺団はボクメツしていく。特にはっきりこうかわるのがスエズ運河の開通の時，更にドイツが統一された時，イギリスもここで帝国主義の変換を強いられる。ジスレリーがインペリヤルコンソリディションを唱える。

かわり方は一つは植民地再編成（経済的にしめる保護関税ブロックを作ってドイツ商品に対抗する），もひとつは第二帝国（インドを中心とした圏）これによってイギリスのインド依存が深くなり77年にはインドはインド帝国に改められる，皇帝はイギリス皇帝が兼ねている。

エジプトがスエズ運河をフランスと共同で作ってあとすぐ財政困難なところをジスレリーが買って，イギリスは4割の株をとってしまう，これには反対運動がおこるがこれを口実に出兵して事実上保護国にしてしまった。トルコの支配権を認めながら同時にイギリスの保護国であることになる。南アフリカが1815年に植民地ができ，19世紀末にボーア戦争がおこる，ここはダイヤモンドと金がでるのでイギリスがとるのである。そして南阿連邦が成立する。

18世紀にはオーストラリヤ，ニコージーランドに植民する，第二イギリス帝国をつくる方向で3C政策ケープ，カイロ，カルカッタという政策がでてくる。他国との対抗上，植民地を締め直したわけだ。

フランスは7月革命の時，アルジェリヤをとってしまった，1887年には併領インドシナ アルジェリアからチュニスへ出てサワラからコンゴーへ抜ける象牙海岸を通ってマダガスカルへ出る，こんどは象牙海岸とマダガスカルを結ぶアフリカ横断鉄道，これとイギリスのカイロ，ケープを結ぶ政策とが衝突してパッシェベ事件がおこる。

ドイツはモロッコでフランスと衝突して2回のモロッコ事件がおこる。これが20世紀始め。ビルマではフトイが衝突している。

ドイツはビスマルクの時代へ専ら他国との衝突を避けようとして協調政策をやっている，同盟條約を作って，フランスを孤立させようなどとはするが，戦争はしたくない ドイツ国王も産業奨励などして自国に意を注いでいる。しかしドイツ国民が個人として海外で活躍するのは積極的に援助している。その為にドイツ商人は後にドイツ領アフリカとなる基礎をドイツ帝国が出来てから間もなく作っていく。19世紀の間である。ニューギニヤにもでている。ビスマルクからウィルヘルム2世になってから積極的に中近東へもでていく。そしてイギリスロシヤと衝突する。

ロシヤは余りいうこともないので略する。

アメリカは19世紀までは殆んど英資本で動き依然として英工業市場であった。これが1870～1880年頃急速にアメリカの産業が伸びその結果1898年に米西戦争がおこるこれでキューバを保護国としプエルトリコをとる，この戦争の原因には定説がない。概説には帝国主義と独占資本と書いてある。しかしはじめ米の資本家はスペインとの戦争に乗り気でなかった，中頃から熱心になる。これはフィリッピンで先に勝ってこれを足がかりにしてシナへ伸びる見通しがついてから非常に熱心になる。丁度列国の関心がシナに注がれている時でアメリカもおくれば せ乍ら中国市場に入ろうとしていたと考えられる。ここで門戸開放主義を主張する。戦后にはパナマ運河をつくるためにパナマ共和国をでっち上げる。こうして中米一帯をアメリカの下に置くことにした。海兵隊が何度も上陸している。

こういうふうな高まりが結局，第1次大戦をおこしたと考えてよい。

第1次大戦の結果，はっきりおこることはこれまで圧倒的に強かったイギリスが没落し，これにかわって，アメリカがでてくることである。これが第2次大戦でもっとはっきりする。ドイツの植民地はたいしたものではなかったが，アフリカのは南阿にとられる，南洋群島が日本に一という工合。第1次大戦后，世界の貿易は上昇するのにイギリス本国の貿易は減退しつづける。世界の輸出量は18%上昇する（1913～1929），イギリス自治領は31%ふえる。本国の方は21%減る。生産ではアメリカがイギリスを越す。そしてイギリス，フランスなどヨーロッパに対して莫大な債権をもつ。これは植民地の編成という点でみると本国と植民地との結びつきがだんだんとけて植民地がアメリカの方へ向いていくという形勢になる。これの建てなおしにイギリスは苦心するが，政治的な譲歩を重ね，アイルランド独立し，エジプトが実際上独立したり，インドが自治権をもつことになる。最后に1931年のウエストミンスター憲章になる。これでイギリスはコンモンウェルズになる。植民地は外交権さえ持ち，ただ王冠に対する忠誠だけでつながっている。古い植民地がいったん解体されて，ブロック経済のような立場からの建てなおしが，第2次大戦までの間に進行している。世界恐慌のあとでほんとにブロック経済になる。これはある点でまだ第1次大戦の結果のひとつとみてよい。結局アメリカが商品をさばききれなかったからおこったものだ。